震動

第22号

発行人　金沢真宗学院
代表者　冨樫珠徳
金沢市安江町15-52
金沢教務所内
電話　076-265-5191

大悲心

高岡英丞

大丈夫です。思い切りやればいいのです。責任は私が取ります。

私たちには、「頑張れ」、「しっかりせよ」といった、本来ならば生きる力となることを念じての言葉があります。けれども残念なことに、多くは、同情やなぐさめ、気休めになっても本当には響かない。互いが呼応、感応することがないように思います。

頑張っているものに、これ以上どう頑張れと言うのか。しっかりせよと言われても、どうすることがしっかりすることなのかとは、励ましがそうならないことへの嘆きの叫びです。ここに人間の限界があります。

私には、困ったとき、不安になったとき、自信が萎えたとき、強く押し出してくれる言葉があります。ずっと寄り添うようにあります。最初に出した言葉です。

けれども、「大丈夫」と、そう言ってくれた人が責任を取ってくれるのかというとそうではない。私には、こういう、大丈夫と押し出してくれ、生きる力、方向となる言葉のもとに、仏さまということを思うのです。無量寿という仏さまは、生きる力となるはたらきなのです。

この言葉は、平野修師が何気ない場面で私に掛けてくださった言葉です。思えば、平野師が亡くなられて長い時が経ちました。けれどもその言葉は今も私を押し出してくれます。

なぜ苦しんでいるのか。なぜ困っているのかということは、自分自身を失っていることによる。自分を知らない。それによって苦しみを免れることがないのです。そういう意味で、自分を獲得する。自分を回復する。それが念仏申すという意味なのです。

いうなれば、自分を回復するということは、ああ、迷うべくして迷っている、苦しむべくして苦しんでいるということに頷くことなのです。

(平野修・平成七年七月二四日　自坊・明證寺にて)

真宗学院特別講義

「本願寺留守職について」

能登教区第五組光琳寺住職　木越　祐馨

【大谷廟堂の建立】

「本願寺留守職について」というお題ですので、親鸞聖人が亡くなってから百五十年近くの本願寺ができるまでの歩みを一緒に学んでいきたいと思います。どういうふうに出来てきて、誰が支えたのかというお話をさせていただきます。前半は大谷廟堂の建立、留守職の成立ということを、休憩の後は本願寺の形成というところへ行きたいと思います。

宗祖親鸞聖人は弘長二（一二六二）年十一月二十八日、いのちを終えられます。『親鸞伝絵』にありますように、当初は鳥部野北のあたりの「大谷」というところに石塔の墓所が設けられました。天台宗の比叡山にある源信僧都のお墓がこれに似ていると言われているのですが、これも石です。周りに囲いをしている。これが当初の親鸞聖人のお墓です。

それから約十年後の文永九（一二七二）年、吉水の北のあたりに墳墓を改めて、とあります。今の崇泰院というところ、そこに廟堂が建立されたのです。お堂ですね。この時代のものを後のわれわれが本願寺と区別するために、大谷廟堂と呼んでおります。六角形の建物です。そして廟堂の正面には唐破風の門があります。周りにこれを囲むように、一人が座れるような礼拝する建物があるわけです。今の寺院とは全然想像がつかない。ごく限られた人しかお参りできない構造であったようです。

いずれにしてもこのお堂の下には遺骨があるわけです。「廟堂にひざまずきて涙をのごい、遺骨を拝して腸（はらわた）を断つ」（『報恩講私記』）と報恩講で読みますよね。

そして御影を安置するという建物は、鎌倉時代からたくさん作られております。一遍上人も、このようなお堂がありましたし、保元の乱で讃岐に流された崇徳上皇の崇徳院御影堂というものも作られております。それから、承久の変で流された後鳥羽上皇の水無瀬神社、あそこに崇りを鎮めるために、後鳥羽の肖像画を安置した御影堂が建てられます。

また木像というのは、どちらかというと関東で流行したものです。水無瀬神宮のは紙に描いた絵ですし、西本願寺には「鏡の御影」があり、「安城の御影」がある。西の方では絵を描くのですが、彫像・彫刻というのは、どちらかというと関東の文化ということになります。北条時宗だとか、いろんな木像がたくさんあったりします。ですから関西と関東との文化の融合が大谷廟堂の姿ということになります。

【はかどころ】

おそらく廟堂近くに親鸞聖人の末娘覚信尼一族が住んでいたと思われます。親鸞聖人が亡くなって墓所ができた。当初は「はかどころ」と呼んでおります。そして吉水に来て廟堂が建立された。それを管理したのが覚信尼一族ということになります。

では廟堂は誰が建てたのかというと、覚信尼ではございません。この廟堂を建てたのは関東の門弟たちです。そこでどういうふうに廟堂を維持し、覚信尼一族がどのように生活をしていくのかということで、問題がいろいろと出てくるわけです。

吉水の土地を所有しておりました小

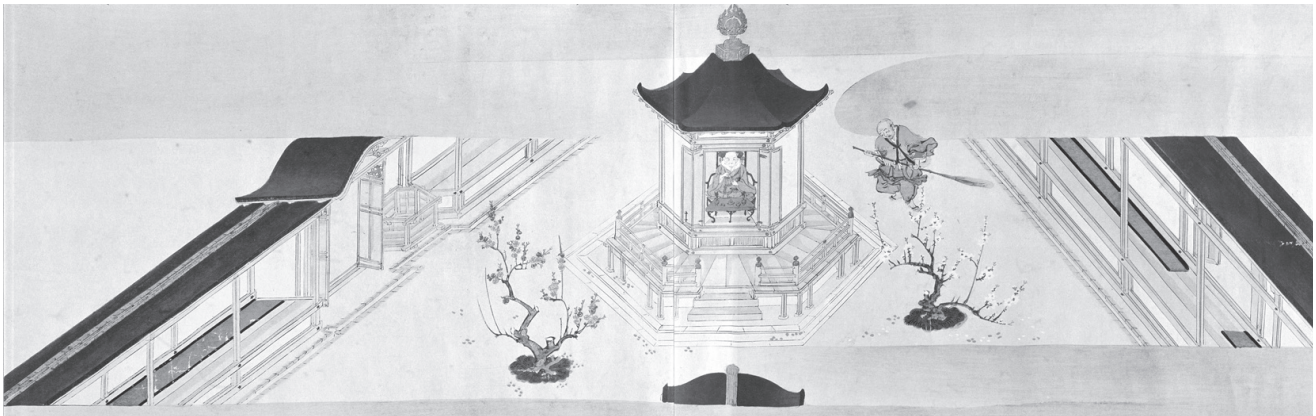
真宗学院を卒業して

卒業式（2014 年 3 月 28 日）

石黒　利明

真宗学院を卒業した。職場がまだ近いこともあって、ほかの人から比べたら通いやすかったのかもしれないが、仕事の都合を時間内につけて遅刻しないようにすることの大変さ。でも、あっと言う間の三年間だった。学院の仲間や指導の先生方、家族や会社の同僚に感謝している。

私はいわゆる「在家」の出であり、妻の実家のお寺を手伝うために真宗学院に入学したのだが、まさか自分がお坊さんになるとは想像していなかった



本願寺聖人伝絵（康永本、廟堂）

野宮禅念というのは覚信尼の後夫で、中院という公家の一族です。公家の末端で、公卿になり得なかった人。それから前夫の日野広綱（藤原広綱）にしても公卿になれなかった人。貴族の一族なのだけれども、公卿になるのではなくて、貴族の世界の末端に生きていた人々が、覚信尼のそれぞれの夫ということになります。親鸞聖人自身の家系も、そういう家です。公卿というのは大臣だとか、大納言・中納言・参議ですが、それにはなれないけれども、一族として、公卿たちの経済的な権益の末端に生きている一族であったのです。

話は戻りますが、小野宮禅念が購入した土地を覚信尼が相続致しました。廟堂ができた二年後に覚信尼に土地を譲るわけです。そしてこの土地を覚信尼が建治三（一二七七）年、「親鸞上人の田舎の御弟子たちの御中へ（以下適宜漢字に改めた）」（注1）と、親鸞聖人の田舎の御弟子たちに寄進するというところから始まっていきます。

そして、「故親鸞上人は、覚信が父にておわしますゆえ」と、わざわざ自分の父親は親鸞聖人だと言っている。「昔の芳ばしさによって」、昔のよしみによって、「上人の御はかどころ」、ここで初めて「御はかどころ」という表現が出ています。「永く永代を限って」、未来にわたって、「寄進したてまつる物なり」とあります。

当時の寄進というのは、寄進したら、その土地の権利が消えるのかというと、そうではございません。この時代の慣例として、何かあったときに土地は元の人に返すということがあります。この土地を寄進したからといって覚信尼の権利が完全に消えるわけではなく、門徒の所有に全部なったかというと、そうではないわけです。

それで「覚信一期ののち」、覚信尼が死んだ後、「このところをあい継がん末々の人」とあります。だから自分が死んだ後、これを管理するのは自分の一族の末々の人だと、そしてそれを保証してくれるのが、この寄進をうけた田舎の弟子たちだと言っています。

田舎というのは京都に対して全て田舎ということです。京都以外は全部、地方を田舎といいます。

ですからこの土地の管理権を自分とその一族が末々まで持つということを、寄進という行為によって覚信尼は手に入れるわけです。それを保証するのが田舎の門徒たちだという、ある種の契約です。だから寄進といっても完全に権利が離れて何もないということではなくて、寄進するからこそ、そこを管理することができる。覚信尼は禅念からもらった土地を、あえて田舎の門弟に寄進することによって、一族の生活と管理するという権利を手に入れ

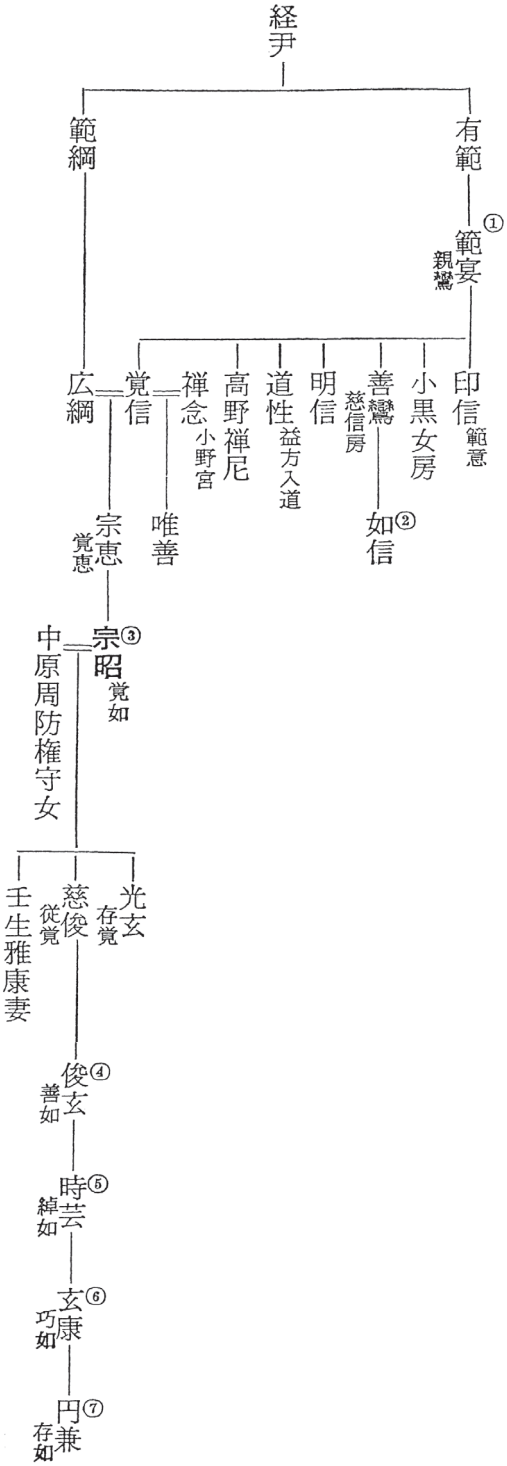
し、未だにしっくり来ないでいる。今から思えば在学中はもっといろんな人と話をしてもっとお互いのことを知り合えばよかった。もうあのメンバーで授業を受けることもなく、集まる場所がなくなってしまうようで寂しいという思いがある。あって当たり前だったあの空間は今はもうない。なくして初めて気付かされるありがたさ。問題のある学年と言われていたようだが、それぞれが個性をちゃんと持っててぶつかり合いながらバラバラだけど一緒だった学年だったと思う。

卒業して感じたことと言われても特に何も変わらない。ただ、あの時の自分とは何かが違う、その何かを問い続けていきたい。教師になったからこうしなければならない、変わらなきゃいけないではなく今の自分を、このままの気持ちを忘れないように。こういうふうに見られたい、思われたいと無理に振舞うことはしなくていい。教法をひろめ儀式を執行はすれど、上からの立場ではなく御同朋御同行としていろいろな意見を聞いていこう。何かを伝えるにも人に解りやすい自分の言葉で話せるようにしよう。自分なんかよりもずっと以前から真宗に関わってきた人々が周りには大勢いるのだから逆に教わることが多いはずだ。いつまでも教わることのできる自分でいられるようにしたい。

たのです。

関東の門弟というのは、みんなが一つのグループを作っていたわけではありません。それぞれ高田門流・横曽根門流という、いくつかのお弟子さんのグループがあって、それが横に繋がっていたかというと、必ずしもそうではない。親鸞聖人がおればこそ、繋がっていたのです。ですから最初の寄進状を「猿島の常念房」に渡したけれども、他の所へはどうも連絡が行っていないということで、後に関東最大の門流になる高田派の顕智房や教念房へも渡している。

門弟たちのグループはバラバラだけれども、この「上人の御墓どころ」へ参詣することによって、繋がりを保っているということが、この中から読み取ることができるのではないでしょうか。



【覚信尼を取り巻く人々】

この時代の大谷廟堂というのは『親鸞伝絵』でいえば、親鸞聖人の「口決を伝へ、面受をとげし門徒」たちがまだ生きていたわけですね。そして親鸞聖人が自分の父だと言わなくてもいいのに、わざわざ覚信尼は言っています。なかなかの女性だと思います。そこで自分の地位をここで確認しているのです。親鸞聖人の娘や、親鸞聖人のお弟子であるその人たちが集う第一世代の時代が、この廟堂の在り方だったのではないかと考えることができる。

その後、弘安三（一二八〇）年に寄進状をまた書くわけです（注2）。今度は三人の名前で書いています。先の寄進状から三年後です。最初に「あま覚信」、ここに「ありはん」というのは、これは写しなので花押があったということです。花押・判があったということで「在判」と書いています。そして「一名丸」、これは写しですので、唯善の童名だと後の人が注を入れている。一名丸はまだ元服をしていません。後夫・小野宮禅念との間の息子で唯善です。最後に「専証」、専証というのが最初の夫・日野広綱との間の息子の覚恵。

この三人の名前を書いていますが、年月日の下に「あま覚信」とあります。当時の文書の作法として、年月日の下の名前は文書を作った人です。この文書を作ったのは、やはり覚信尼です。

最終的には「故親鸞上人の御墓の地の本券・手継を、田舎の御同行の御中へ、参らすべしといえども、京の習い境争論なども候へば、この御るすし候

三年という月日をどのように過ごしてきたのか、改めて振り返ってみる。三年前と何ら変りない私がいることに気づかされる。愚痴、文句、言い訳を繰り返し、人と比べ、人を責めてばかりの「煩悩熾盛、罪悪深重の凡夫」である。入学当初、三年後には、晴々しい気持ちで卒業する自分を想像していた。何か大きくなった自分を得られるような気がしていた。しかし、卒業を迎えても、私は、今も昔も、私のままである。私がどうにかできるような素直な者ではなかった。どうにもならず、どうにもできない私がいる。そして、未だ、ここに存在する私自身そのものと向き合えずにいる。他の誰でもなく、私自身が一番の厄介者だと知らされる。

そんな私が今、はっきり言えることがある。それは「真宗の教えを聞き続けたい。手を合わせ、お念仏申さずして、この私は生きられない」ということである。

生きる上で様々な問題に突き当たる。考えても解らない解決策を求め、小さく、とても頑固な頭で考えてきた。しかし、どうにもならず、最後に辿り着くのは、「なぜ今ここに私はいるのか」ここであった。

そんな問いを抱える私に聞こえてくるものがある。真宗の教えを聞き続け、

安本　知子

わんずる尼が子どもに預けおき候」と言っています。

この廟堂を建ててくれたのは関東の門弟なんだけれども、この土地に関わる権利というのは、代々のものを順番に持っているわけです。廟堂を建ててくれたのは関東の門弟だから、これらの証文を本来は関東の門弟に預けるべきなんだけれども、境の相論、土地の境の裁判があったら、いちいち関東から持ってくるのが面倒だから、私の方で預かっておきますと。土地は門弟へ寄進したということは、本来、門弟に寄進するということは、証文も全部渡さなくてはいけないのだけれども、覚信尼は渡さない。裁判をするのに便利だということで、こっちに持っていた方が楽でしょうと。そこがすごい。だから本来の権利は渡していません。

【るす】

ほぼ晩年に近い弘安六（一二八三）年の、いわゆる『最後状』（注3）に、「十一月十八日より、咽の病をし候て、今はこのたびぞ終わりにてそうらえば、田舎の人々の見参も、今年ばかりぞ」と。いよいよ喉が病気になってきて、いのちが危ない。田舎の面受口決の門弟たちと会うというのを見参と言っています。対面する儀式があったのでしょうか。それこそ親鸞聖人をわが父と覚信尼がわざわざ言うだけのことはあって、大そう尊敬される存在だったのでしょう。なかなか知恵のある女性であったということがいえると思います。「この上人の御墓の御沙汰をば、専証房に申おき候なり」と、ここではっきりお墓の沙汰を覚恵へ伝えたいと決めていくわけです。お墓の沙汰というのは何なのか。まだ留守職という言葉は出てきません。

もう一回、弘安三年の寄進状案に戻っていただければと思います。「この御るすし候わんずる尼が子ども」と。留守をするという言葉で出てきています。まだ明確な権利、地位というのは確定していないので、留守職という言葉は出てまいりません。では留守とは何なのかということです。今、留守とは留守番ということですが、当時の社会では「留守所」という言葉があります。

平安時代の終わりになりますと、加賀の役所は当時、能美郡にありましたが、本来なら加賀守が、国元へ来て国を治めなければならない。

しかし貴族はみんな地方に下るのが嫌なのです。加賀守より上位の、加賀守を推薦する権利を持つ貴族がいるのです。そして一族などから加賀守を決めます。やがて加賀守も下向しなくなります。そして目代という人が下ります。地方の経営に長けたスタッフと共に目代が下り、加賀から税金を取って、それを加賀守へ渡し、さらに加賀守を決める権利を持った貴族に渡すという時代なのです。その目代が行く場所が留守所なのです。つまり加賀守が留守だから、それを目代が預かる場所という意味です。ですから廟堂においても本来は田舎の門弟たちが主体なのです。けれども参詣に来るだけですから、その門弟たちが参詣した時以外は、当然留守になるわけです。留守をするというのは、門弟たちの留守をあずかるという意味です。留守所という言葉から、当時の留守という意味が推測できるのではないかと思います。

ですから、あくまでも主体は門弟です。けれども留守をあずかるには、もともと土地の所有者である覚信尼とその一族に権利がある。それを丁寧なかたちで三回も寄進状や譲状にしたためて、関東の門弟に認めさせていく。

そうして留守職という言葉が出てくるのが、先ほど言った覚信尼の長男覚恵が自分の長男覚如に記した譲状（注4）です。覚恵・覚如父子は唯善と相論（正安三年・一三〇二年～延慶三年・一三〇六年）をするわけです。

唯善は『歎異抄』をまとめた河和田唯円の弟子です。それで「唯」という字をもらっています。自分の父親が持っていた土地を、父親が母親である覚ひたすら歩み続けてきた先達たち、今ともに生きる仲間たち、そして、宗祖親鸞聖人が「ともに歩もう」と、この私に寄り添ってくれている。尊き御同朋御同行が、こんな私とともに歩み、ともに生きてくれている。過去という歴史から今現在へ。そしてこれからの未来が「道」となっていく。すべてが繋がっている。ここに、私存在の意義があり、生きる価値が見出されていくと感じている。

有難き尊き縁に深く感謝し、南無阿弥陀仏とお念仏申し、生きていきたい。

キャンパスレポート

3年生　松本　早苗

入学時、私は〝鸞〟の字が書くことができなかった。自分のレポートを読み返して思い出した。

一年目のレポートには精一杯かっこつけている自分がいた。〝生かされているのだから期待に応えないと〟〝自分が諦めた自分を願ってくれる人がいるからには しっかり生きないと〟勝手に気負い、焦っている自分だ。その時、聞こえていたのは「〝かっこつけたってどうしようもない自分〟〝逃げたってそこにいる自 分〟に気づけ」という声。今もそう、気づいてないのはいつも自分だけだ。

信尼に渡した。寄進したのではないから俺の方に権利があるということを主張しました。関東の方では唯円など彼を支持する門徒も、少数派ですけれどもいたようです。

そして青蓮院というところで裁判をやって、最終的には負けます。それで廟堂を壊して、最初にできた御真影と、床下を掘って、遺骨を持って関東へ逃げ、鎌倉常葉というところに至っている。

留守職という言葉も、当時の社会では職務とか地位を表す言葉です。その言葉の中には、経済的な収益、権益も含まれます。関東の門弟から懇志が上がれば、そこに留守職という言葉があるわけです。そして相論の中で、どちらに権利があるのか。争う中で生まれてきた言葉が留守職という言葉ではないのかと思います。そこまで覚信尼の段階では踏み込んではおりませんけれども、相論の中で生まれた言葉といえます。

ここで再び覚信尼の最後状を読んでみますと、非常にいのちが危ないということで、覚信尼の叫びが聞こえてくるような気がします。

「さてはこの上人の御墓の御さたをば、専証房に申おき候なり、尼が候つるほどは、田舎の人々の御心ざしのものにて、このものどもをば、育み候つれども」と。ここですね。「田舎の人々の御心ざし」、送ってくださる懇志ですね。私が死んだ後、覚信尼一族が、これで育まれ、生きていけるのだと。「今はいかがし候わんずらんと、心苦しくおぼえ候、田畠も持たず候えば」、田畠も財産も持っていないので、「譲りおく事もなく候」、そこから後、収入がないということです。

「ただ一向田舎の人々をこそ頼みまいらせ候えば、尼が候しに変らず、御覧じ放たれず候えかしとおぼえて候」。だから私が死んだ後も、生きている時と同じように、この子たちを見ていただき、無視をしないで、見離さないでほしい。「面々へ申すべく候えども、さのみ判をし候わんも、侘しく候て、皆々同じ事に御覧候えとて、ひとつに申し候也、あなかしく、あなかしく」と述べています。

ですから面受の門弟と親鸞聖人の娘という両者の関係、第一世代が終わっていこうとうするわけです。その中でもう一度頼む。そこに懇志、懇意で成り立っていたものが、やがて権利として明確にしていかなければならないという状況が生まれてきたのではないでしょうか。

覚信尼は、自分が亡くなって、面受の弟子たちも亡くなっていくと、親鸞聖人を直接知っている人たちが少なくなっていくわけです。そういう中で、この子どもたちはどう生きていくのか。その廟堂をどう守っていくのかというのが大きな問題になっていったのではないかと思います。

（休　憩）

【覚如上人】

覚恵の譲状で初めて、廟堂ではなくて御影堂という言い方へと変化していきます。十四世紀に入り、覚恵から覚如へ譲られて行くのですが、覚如はそれ以前からすでに活動をしております。申し訳ないのですが、覚恵という方は、わりと凡庸な方だったのかなと思います。特別、聖教をつくっているわけでもないのです。

覚恵が譲状を記した正安四（一三〇二）年から三十年以前、覚如は若く興福寺やいろんなところで勉強しております。大変男前だった人ですし、若いときからなかなか優秀で、それは関東の門弟も認めていたようです。聖人の『親鸞伝絵』を、廟堂の絵を描いた、いわゆる絵巻物をつくっています。三十三回忌を期して『絵伝』とか『報恩講私記』をつくり、報恩講という法要を始めていく。これは覚如で、覚恵ではございません。覚如が大変優秀な方だったというのが分かります。

いっぽうで生意気だったのか、関東

二年目のレポートには「かっこつけても無駄、逃げても無駄」と気づいてきた自分がいる。私がどうしようもないということは、私以外の人みんなが知っている。かっこつけることをやめて、向き合って見えてきたことは、とんでもなくわがままな自分。都合の悪いこと全てを見ないよう、逃げて逃げ回って、独りぼっちになるまで生まれたことすら自力のつもりだった。恥ずかしい。なんて私の人生は恥ずかしいことしかないのだろう。そんな自分からまた逃げたくて、受けとめることが苦しくて…そして聞こえてきた声が「そのままでいい、あきらめずに生きろ」という声。

仏法は聞けば聞くほど、自分が恥ずかしく、苦しく、逃げたくなる。でも逃げてはいけないと思いこんでいた。ある時「逃げてはいけないではなく、逃げなくていい」という声が聞こえた。ここは思いきり悩み苦しむことができる所。私がわたしと出逢い、くらべず、あせらず、あきらめず、ほんとうに生きるということを学ぶことができる所。私がわたしをやめたくて諦めても、わたしを願ってくれる人がいて、同じ方向を向いてくれている。逃げたくて目をそらして下を向いても、後ろを振り返り立ち止まっても、かわらず聞こえるのは「ともに歩もう」という声だ。

だから私にとって真宗学院は宝物。

の門弟に嫌われるということもありますし、長男の存覚とは何度も義絶をしている。なかなかの波乱の人生を送った人物ということです。

この覚如の時代となりますと、親鸞聖人の面受口決のお弟子さんたちがだんだん亡くなっていく。関東の門弟たちも二代目、三代目ということになっていく時代を迎えるわけです。すると関東と大谷との関係に、遠方でもありますし、微妙な変化が生じてくる。やはり覚信尼が一生懸命、ガラス細工のように作っていった関係も大きく変化していく時代となりました。

そこで、覚如は留守職というよりも主体的に別当職という言葉を使っています。これは、覚恵が覚如に本願寺を譲ったとき、別当職という言葉を使っている。別当という言葉は、最高責任者という意味です。最晩年、観応元（一三五〇）年の譲状（注5）には、はっきり別当職という言葉を覚如は使うようになります。

そこには何があるのだろうか。関東の門弟と覚如一族はどういう関係に保持していくのだろうか。ある種の対等に近い関係です。そこには私の考えるところでは、覚如・存覚父子には、聖教の制作があるのではないか。

【聖教を作る】

親鸞聖人は、自筆ないしは、書写本によって聖教をたくさん残してくれています。鎌倉仏教の祖師の中で確実な聖教を残しているのは、親鸞聖人と日蓮上人の二人だけです。私たちが親鸞聖人を学ぶときに確実な聖教がある。日蓮さんもよく書いていますね。文字に書かなければ何も残らない。それを残してくれているというのは、私たちにとって大変ありがたいことです。

親鸞聖人が亡くなった後に、例えば門弟も聖教を作っております。唯円は『歎異抄』を作っています。それから、横曽根門徒は『親鸞聖人血脈文集』として、御消息を集めている。それから高田の真仏は大変な親鸞聖人のお弟子さんで、親鸞聖人より早く亡くなっている人ですけれども、『経釈文聞書』というのを書いています。親鸞聖人の書いたものを抜粋したものです。

それに比べて圧倒的に覚如・存覚父子の著作・聖教はたくさんございます。『口伝鈔』『改邪鈔』、そのほかいろいろの聖教を作っております。やはりこの父子は聖教を作る能力というものを持ち得ていたのだと思います。これが関東の門弟たちを圧倒する要素ではなかったのかと思います。それから四代目の善如です。覚如の孫です。存覚は本願寺の世代に入らなくて、弟の従覚の子どもの善如が四代目なのです。善如は親鸞聖人の御消息を集めて『末燈鈔』を作った人です。

今の私たちは『真宗聖典』があるので簡単に見れるのですが、当時はなかなかそんなふうにはいかない。親鸞聖人のお手紙をどう集めて編さんしていくかというのは大変なことです。今みたいに簡単に見せてくれません。自分のところにある御消息を、なぜほかに見せなければいけないのかという状況です。そういう中で『血脈文集』『末燈鈔』『御消息集』というものが、どんどん作られてきました。

耳底にとどまっている聖人の言葉をしゃべってくれる面受口決の門弟たちがいる間は、その人たちの話を聞けばいいのですけれども、その次の世代になっていくと、親鸞聖人の書いたものはたくさんあるけれども、どう理解して解釈していくかになっていくと、わ

2年生　野村　進

「南無阿弥陀仏」

この言葉が一体何を示そうとしているのか、この言葉の「イワレ」を聴聞に来ているのだと思います。一年間、同級生である老若男女の方々の発表や彼らとの会話、講師の方々の講義は、そうなかなか味わえるものではありません。貴重な経験をさせて頂いていると言えます。夫婦、婿を迎えなければいけない方、定年された方、聴講生から本科生になられた方、一般家庭から嫁いできた婿殿、高校時代の恩師など、普段の職場と自宅の往復の生活では出会うことはまずない。巷では「生」や「死」といった言葉は溢れているけれども、日常生活において、まず「自己」に突きつけられているとは思わない。むしろ、そのことが忌避されている。しかし、突きつけられていることが現実であり、本当の「日常」なのだということを学院という空間（サンガ）を通して、私に知らせてくれているのだと思います。

まだまだ、私は先人には及ばない浅学者ではあるけれども、七高僧や親鸞などが遺された聖教類は、『安心決定鈔』中の「もとの阿弥陀の命に帰せよ」ということを知らせんが為、「南無阿弥陀仏」しかないのだということを、言葉となり、音となり、様々な化身となり、私自身の為に教えてくださって

かりやすい聖教が必要になってくる。それを関東の門弟たちから求められていたのは、本願寺の覚如・存覚父子ではないかと思います。文字に残していく、そういうものを作り上げていくというのは、覚如・存覚・善如のやった仕事ではないかと思うのです。そこに本願寺の大きな位置があるのではないかと考えています。

最終的には蓮如が『御文』をつくっていきます。それを実如が五帖にまとめて聖教化、冊子化していきました。これは本願寺が前近代でやった最後の聖教化の仕事です。あとはそれを出版していくということになっていきますから、蓮如までが聖教を作成していく。そこに本願寺の存在意義があったのではないかと思います。

【本願寺の位置】

もう一つ存覚の仕事ですが、『存覚袖日記』という史料があります。当時、地方でいろんな御本尊があったのです。それに裏書をしてほしい、賛を書いてほしいと、地方（田舎）の門弟から、存覚は求められました。関東の門徒の、自分たちの門流の指導者ではなくて、わざわざ本願寺へ来て、存覚に求めていく。卑近な言葉で言えば、お墨付きをもらいたい。その記録を存覚は『袖日記』に残しております。

そして表には『大経』や、そういう御経から賛を書いてもらい、いつの誰の本尊だということを裏に書いてもらう。こういう仕事も存覚はしているわけです。

関東の門弟といっても、みんな文字を書けて読めたわけではない。その中で、文字が読めて、漢文ができて、聖教を制作する能力を、この親子が持ち合わせていたということです。ここに本願寺一族と関東の門弟との新たな関係が生まれてきた。次の段階へ入ってきたのではないか。そこでは、もはや留守という感覚や概念はなくなり、別当という、管理する責任者であるという自覚が生まれていったのではないかと思います。

そこで一つ触れておかねばならないのは、実は本願寺という寺号はいつ出てくるのかということです。これについては、専修寺文書の中に早くから本願寺という言葉が出てまいります。それは弘安十（一二八七）年、親鸞聖人が亡くなって廟堂ができて十五年後には本願寺という言葉が出てきます。

最初、廟堂に専修寺という額を立てた。ところが当時の政府は、専修念仏ということを徹底的に弾圧しましたから、それを使った寺号は駄目だということで額を撤去されて、それが高田へ渡って専修寺になった。そして本願寺の初見というのは元亨元（一三二一）年のことだと。

でも本願寺が伝えている私文書の中に、早くから、一二八七年には本願寺と出てきております。最近、西本願寺が『増補改訂本願寺史』というのを出して、そこでやっと触れております。私的に名告っていたのではないか。まだみんなに公認されていなかったといわれています。

専修寺と名告ろうとしたけれども、専修念仏の弾圧があり、それは駄目だということで、もう一度古くから私的に使っていた本願寺を使ったのではないかという。一応合理的な説明になっていますけど、実態はよく分かりません。いずれに致しましても、早くから本願寺という寺号があったということです。これも前述した覚如の自覚と関係があるのではないでしょうか。

【本尊を安置する意味】

建武三（一三三六）年に唯善が壊した後に再建された六角形の御堂が、南北朝の内乱で焼けるんです。その後、御堂が再建されます。これはもはや六角形ではなくて、おそらく現代のような四角形のお堂だろうと考えられております。最後に大きな問題がここに残っております。阿弥陀如来安置の問題

いるのだと。故に、一年間を通して私が学んだことは、後の2年間、その先も「報恩謝徳」の生活が続くのだということを教わったのだということです。

最後に、学院に通うことを支えてくれている家族、様々な都合を呑んでくれている職場、知人や友人へ「感謝」を刻むと共に、入寺者を探している方が居られましたら、どうぞ御一報戴きたいと存じます。私が参ります。

移動研修（2013 年 9 月 8 日、恵信尼公廟所にて）

でございます。覚如は、廟堂の中に阿弥陀如来を安置したいと望みました。ところが関東の門弟たちは、それに反対いたします。

その阿弥陀如来の安置の問題で、高田専修寺の順証という人の手紙があります（注6）。

「定専坊主の時、大谷の坊主御みえいをかたわらへうつし申し候て、本堂には阿弥陀を立て申し候べきと候し」と。定専坊主は正平二十四（一三六九）年に亡くなった高田の定専です。大谷の坊主は覚如のことです。阿弥陀を立てるという表現ですから、木像の御本尊ということになりますね。御影を傍らに移して木像の阿弥陀さんを安置したいと、覚如が希望したということです。

「定専再三御申し候によりて、うちおかれて候に」とあります。十四世紀の初めというのは、関東の門弟たちが、まだ意見を言える時代でした。ですから定専は、それは駄目だと言ったのです。そして「うちおかれた」ということは、御影だけがあったということです。ですから覚如の意図は成就しなかったのです。

「いま又かように御はからい候間、先師の御申しのごとく歎き申し候えども、御もちいなく候、いかように候べきやらん、談合申したく存候」。今また大谷の善如がこのように言ってきた。私は定専坊のときと同じように、それは駄目だと言ったけれども、私の言うことを聞いてくれない。そこでどうしたらいいだろうか、皆さんと相談をしたいと言っているのです。

ですから関東の門弟たちと決定的な対立は、本尊を安置したいという問題があったのです。

最終的には安置できたのです。そして専修寺文書では、この文書を最後に、本願寺に関する文書はなくなります。ですから順証および善如の晩年から綽如の初めのころになって、関東の門弟たちと、ほぼ本願寺は縁が切れた状態であったようです。

本願寺に関する文書がなくなるということは、彼らは彼らの門流の中で動いていく。本願寺は本願寺として、これまでのような関東の二代、三代目の門弟を当てにしないで、新たな動きをしていかなければならないということです。

大谷廟堂の頃は、覚信尼が田舎の門弟たちに、あれほど細やかにお願いします、お願いしますと言った関係が、この段階でなくなっていったのです。

関東の門弟は関東の門弟で新たな時代へ入ってき、本願寺は本願寺として新たな時代へ入っていく。ちょうど十四世紀後半には、それぞれの門弟、門流が新たな動きをしていくという時代へ入っていったのです。

そこで綽如は井波の瑞泉寺を拠点にして、信州北部にいた磯部門徒と関係を結んで新たな動きをしていきました。その背景に関東の門弟たちと決裂していった大きな波乱があったのです。

そこで本尊を安置する意図ですが、三代・四代・五代にあたる覚如・善如・綽如がなぜ阿弥陀如来の本尊を安置したいと願っているのか。これも大きな問題で、私も考えさせてもらったのですが、なかなかいい答えが見つかりません。考える上で一つ重要なことが『伝絵』の中に出てまいります。「建長八歳、丙辰、二月九日夜寅時、釈蓮位夢想の告に云わく」、という、釈蓮位夢想の段ですね。「聖徳太子、親鸞聖人を礼したてまつりましましてのたまわく」、そして「しかれば祖師聖人、弥陀如来の化現にてましますという事明らかなり」とあります。親鸞聖人は阿弥陀如来が化現した存在だと言っています。

化現については今の感覚ではなかなか難しいかと思うのですが、『高僧和讃』を見ていますと、法然上人は勢至菩薩、聖徳太子は観音と、いろいろ出てきます。この娑婆世界に現れて私たちを救ってくれる。そういう姿として現れてくるという。法然上人は、勢至菩薩の生まれ変わりだと。三度も生まれ変わってきた。このたびは一番長生きで、と出てきます。そういう捉え方です。

だから、親鸞聖人が阿弥陀如来の化現であると、覚如は『伝絵』でいうわけです。また「入西房観察」という段があります。「御弟子入西房、上人（親鸞）の真影を写したてまつらんとおもうこころざしありて」というところです。

「夢想は仁治三年九月二十日の夜なり。つらつらこの奇瑞をおもうに、聖人（親鸞）、弥陀如来の来現ということ炳焉なり」。この奇瑞を書いて、親鸞聖人は阿弥陀如来が来たり現れたということは明らかであると言っています。それぞれ「弥陀如来の化現」「弥陀如来の来現」という言葉を使って讃嘆をしています。いわば本地垂迹説で説明するならば、親鸞聖人の本地は阿弥陀如来というわけです。その本地を本尊として立てる。そういう意味があったのではないかと、私は思うのです。そ

ういうふうに読むことができれば当然、親鸞聖人の御真影、そしてその本地、本来の姿である阿弥陀如来を立てるということ、それは自分の考えを具体的な姿で現していくということではないかと思います。

【おわりに】

本願寺が両堂建立するのが、七代の存如のころです。その場所は大谷廟堂以来の土地ですから、決して広いものではない。けれども両堂に分かれた。これが存如時代、十五世紀の中ごろと考えられております。その伝統が、今日まで続いているということになります。

大谷廟堂の建立というのは、親鸞聖人の娘である覚信尼、面受口決の門弟たち、その両者の契約という言葉は語弊がありますが、そういうふうに成り立っていったものです。覚信尼は自分の子孫にその権利を伝えていきました。その権利の言葉が留守職という言葉になったのです。留守職という言葉の背景には、あくまでも、その主体は関東の門弟であるということです。

その第一世代たちが亡くなっていったときに、後を継承した覚如・存覚は聖教を作り上げていくことによって関東の門弟たちと、対等になっていったのでしょう。そういう中で、もはや留守職ではない、別当職だという考えを持ち、親鸞聖人が阿弥陀如来の化現・来現であるということを、阿弥陀本尊を立てるという動きで伝えようとしたのでしょう。

しかしまだまだ関東の門弟たちを押し切ることはできなかった。けれども善如・綽如の段階に至って、阿弥陀如来を立てることに成功している。そして存如の時代に両堂が生まれていく。

以上、大谷廟堂が本願寺へと変化する中で、御真影・遺骨だけではなくて、聖教を作り上げていきました。そこに本願寺が大きくなっていく背景があったのではないかということを、あらためて申し添えておきたいと思います。

（終了）

注

(1) 建治三年十一月七日付覚信尼大谷敷地寄進状（専修寺文書）
(2) 弘安三年十月二十五日付覚信尼大谷敷地寄進状案（専修寺文書）
(3) 弘安六年十一月二十四日付覚信尼大谷敷地寄進状案（専修寺文書）
(4) 正安四年五月二十二日付覚恵大谷敷地譲状（西本願寺文書）
(5) 観応元年十一月二十一日付覚如本願寺別当職譲状（西本願寺文書）
(6) 年未詳十一月二十日付専修寺順証書状（専修寺文書）

『教行信証』入門④

本願に帰す ―名号の意義―

平野　修

1．仏陀と名号

まず前回触れることのできなかった仏陀と仏陀の名号について問題にしていきたいと思います。我々は阿弥陀仏という名は知っていますし、その名号を本尊としていますが、そういう仏陀の名、また仏陀という言葉が何を表しているのか。

普通に仏陀というと釈尊が考えられます。ではなぜ釈尊が仏陀なのか。するとそれは証りを開かれたからだと。その証りの内容について語られてきた一つに、生死を超えるという表現があります。

もっと積極的にいえば、仏陀とは、我々の経験している世界と違う世界があることを表している名ということになります。

我々の経験領域のことを三界といいます。仏陀とはその三界を超えた世界を表す名。ですからそれは必ずしも人格を表すわけではありません。

三界というのは、欲界、色界、無色界で、現に我々が経験している領域です。欲界は欲として生きる領域。色界は、色というのは形という意味ですが、だいたい芸術世界に当たります。美しいと感じたものを絵に残す、写真に撮って喜びとする。こういう領域が色界です。

無色界は色という形がない世界です。いうなれば精神世界、思想の世界です。たとえば書道は色界と無色界を兼ねていると言えます。書道の文字を見て、意味を考える世界は無色界ですし、形が美しいと感ずるならその時は色界にいることになる。

我々は、欲の世界だけでなく、芸術、思想に当たる領域も持っている。そういう経験領域を三界というわけです。そして仏陀とはそういう三界を超えた世界ありということを表す名であると。

これは我々にとってどういう意味を持つかと言うと、三界を超えた世界があることが分かれば、この三界に耐えることができるという意味になります。

三界はいうなれば苦の世界です。その三界しかないということになれば身動きが取れません。しかし三界を超えた世界があると認めることができるならば、我々にとっては救いという意味が出てきます。

三界の中にありながら、助かるとか救われるということがあるとすれば、それは三界を超えた世界ありと知るところにある。仏陀はそういう三界を超えた世界ありということを表す名であると。ではどうしたら三界を超えた世界があることが分かるのか。

我々からすれば経験領域が三界なのですから、超えた世界があるとも、ないとも知りようがない。そういうものがどうしたら超えた世界ありと知ることができるのか。それは三界を超えたものから教えてもらうよりほかに知りようがない。

それで、三界を超えた世界を知らないものに、超えた世界ありということを知らせようとして表されたものが、「我が名を聞け」、「我が名を称せよ」という、名号についての聞名、称名ということだったわけです。

それは三界を超えた世界を知らないものに、超えた世界ありと知らせるために立てられた方法、道なのです。

この「聞」という字は仏の「教化」を表しています。「仏の名号を聞く」とは、仏がそれをもって教化される。ですから我々にとっては、その教化によって、三界を超えた世界があるということに気がつきました。だからこの世界を生きていくことができますという表現が南無阿弥陀仏になります。

念仏というと我々が口を動かすことになっていますが、こちらが口を動かすに先立って、三界で身動きが取れなくなって行き詰っているものを、その三界を超えた世界ありというところに導くために我が名を聞けというのですから、その名は利用するためにあるわけではないのです。

念仏したらどうなるとかこうなる、これは念仏の利用です。念仏は利用のためにあるのではなく、仏の教化ですから、我々自身が尋ねられ、問われることとしてあるわけです。

その三界を超えた世界の分かり方ですが、たとえてみますと、白い紙の上に白いものを置いても分かりにくい。ところが青色の上に白を置けば際がはっきりします。

つまり三界を超えた世界が分かるというのは、我々の世界が三界のほかにないというふうに分かる。限界が知れるという形でそれを超えた世界を知ることになるわけです。

三界にいる我々は、三界にいることが分からないのです。ところが全然違う世界に触れると、際がはっきりしてくることで、三界の中にいるという、限界が知れる。

努力すればなんとかなるというのが我々の立っている立場です。けれどもそれは限界が分からないことを意味します。よく自力といいますが、自力というのは限界を認められない心です。

限界という際を知らないために苦しみに果てがありません。そうすると限界が知れた時には自力は終わるということになります。限界が知れたということがどれだけ我々に安心を与えるかということです。

ですから、助かるというと限界など飛び越えることが助かることだと考えがちですけれども、仏教が教えるのは、三界を超えた世界を表す名として仏陀ということがある。

そういう仏陀に我々が遇うという遇い方は、限界が知らされるという形で、仏陀という、超えたものとの出遇いがある。そしてそこには助かるという意味が出てくると。そういうことを明らかにしたものとして伝わっているのが善導大師の言葉です。

善導大師は、三界を超えた仏陀の世界に自分は遇うことができた。どうしてそういえるのかというと、この自分自身は現在迷っていることは言うまでもないが、その迷いはたまたま迷っているということでなく、過去からずっと迷っていた。そしていま迷っていると。

しかもその迷いは、いつか消えてなくなるという性質のものでなく、生き続けている限りその迷いを離れることがないと信ずることができたからだという答えを出しています。

限界がはっきり知れたということです。限界が知れたということは、この身、この世の全体が知れた。そこから、この身、この世を深く信ずることができるというかたちで、我々と仏陀との出遇いがあると善導大師は語るのです。

聞名、名を聞くということは、仏の

教化だと言いましたが、それは我々にとってはこの身この世を信ずるという意味になります。ですから仏の名号ということと我々の信心ということは、必然的な関係があるわけです。

繰り返しますが、仏陀の名、名号とは三界を超えた世界ありということを表し、さらに超えた世界ありということを知らせようとして立てられたものです。ですから仏陀の名に一切が収まっているというのが法然や親鸞の立場です。

我々は、もっと頑張れば、運が良ければと言って、自力という切りのない生活をしている。ですからどこまで行っても中途半端で終わるしかありません。

そういう苦悩から出るには、三界を超えた世界に目を覚ますより他にないということで、三界を超え世界ありということを表す仏陀の名を立てて、その名を聞け、目を覚ませと言われたわけです。

その目の覚まし方が、「信心」という覚まし方だったわけです。自分自身の全体、この身この世の限界が知れるという形で目を覚ます。ですから信心を抜きにすれば名号は単なる言葉か都合のいい道具になってしまうわけです。

自分の、あるいはこの世の限界が明らかに知られたという目覚め、それを信心と言う。それは自分を深く信ずるという知り方で、三界を超えた世界と出遇うのだと。

ここまで仏陀とその名号について触れてきました。

2. 本願に帰す

法然上人は一貫して「ただ念仏」をお勧めになられた方です。けれども、その念仏についていろいろな受け止めがあったわけです。

南無阿弥陀仏と口にしていればたとえ悪を成しても往生の妨げにならない造悪無碍ということも念仏の受け止めです。

『御伝鈔』に出てくる「信不退、行不退」、これも法然の「ただ念仏」に対する受け止めの問題です。あるいは、一念多念というのも受け止めの問題です。

そして親鸞はその受け止めを、『教行信証』の「後序」で「雑行を棄てて本願に帰す」（聖典三九九頁）と出された。「雑行を棄てて本願に帰す」というのは、法然の「ただ念仏」に対する親鸞の受け止めだったわけです。問題は、ここでいう「雑行」とは何を指しているのかということです。

仏教の行は、最後はそれによって三界を超えた世界、証りの世界へ出なければならないわけです。けれどもそうならないのは行じている自分が残っているからです。

証りの世界というのは、自分が、とか、一生懸命ということを超えた世界ですから、自分をもとにしている限りは出られない。

三界を形成している自分というものを出発点としながら、三界を出ようとしているわけですから、自分の首根っこを捕まえて自分の全体を持ち上げようとするようなものです。できない相談なのです。そういう、できない相談をやっているものが、代わりに念仏を持ってきても、情けない話にしかなりません。

ところが親鸞は、「ただ念仏」と言われたことを、「雑行を棄てて」と受け取った。雑行を止めたわけではないのです。

親鸞聖人によると、雑行とは自力をもとにして成すところの行が雑行であると。その自力というのは、その性質は切りがないわけです。

おそらく、親鸞も行じてそうならないのは、行が難しいから、環境が悪いから、努力が足りないから、といろいろ思ったはずです。ですから環境が良ければ、もっと頑張ればとも思っていたでしょう。

そこに「棄てて」という表現です。棄てたというときには、理由がはっきりしたわけです。それは能力の問題でも、環境の問題でもなかった。その理由とは、如来が真実であるからだと。

この如来が真実であるという意味は、我々の全体が、虚偽であり真実がないということがはっきりしたということです。これがないと、環境が良くなれば、もっと本気になれば、努力すればという果てしない自力を延長するしかない。

「棄てて」というのは、三界にいるものが三界を出ようとしながら、その際を知らないままで果てのないことをやっていることがはっきりした。限界がはっきり知れた。そこから「本願に帰す」ことが出てくるわけです。

この「棄てて」という使い方は、「棄てて」それからということではなく、「棄てた」ということがそのまま「本願に帰す」になります。

本願は、三界を超えた世界を、三界で苦しむものに知らせようとして立てられたものです。その本願は名号としてあります。その名号の謂れに目覚めた、頷いたことを「帰す」という言葉で表したわけです。

いろいろな教え、宗教で、「信ずる」という言い方はあっても、「帰する」という表現はありません。一般に信ずるという場合は、信ずるという形で効果を期待し、利用するわけです。けれども真宗が伝えてきた「信ずる」とは、「帰する」のです。ここに真宗独特の意味があるかと思います。

この「帰する」というのは、姿勢ということに関係する言葉と考えてはどうでしょうか。ゆがんだ形で立つのも、まっすぐに立つのも姿勢です。それを生き方に直せば、生き方を決めているのは姿勢なのです。

つまり真宗というのは、生きる姿勢に関係するものであって、生きる手段に関係するものではないわけです。

「化身土末巻」に、「仏に帰依せば、終にまたその余の諸天神に帰依せざれ」（聖典三六八頁）という『涅槃経』の文を引かれますが、これも姿勢という言葉で考えれば了解できると思うのです。つまり一つの姿勢を取ったら、別の姿勢は取れない。

如来に帰する、本願に帰するという場合も、姿勢ができる。そういう一つの姿勢ができれば、他の姿勢は取れないということで、「帰する」というとき、生きる姿勢というものが出てくる。あるいは今取っている姿勢が正されるという意味もあるかと思うのです。

ですから「雑行を棄てて」という受け止めは、それまで取っていた姿勢、つまり自力の上に立って自力を超えようとしている全体が明らかになった。絶対にできないことであると知ることができた。信ずることができたと。すると姿勢が正される。これが「本願に帰す」です。

ですから、真宗が勧める「信ずる」ということは、今の言葉に直せば認識する、知るという意味です。「ただ念仏」を受けて、我々に信心が生ずる。それは、自身が信ぜられることだと。こういうふうに、親鸞は念仏と信心との関係を「雑行を棄てて本願に帰す」と表されたわけです。

この念仏と信心との関係について善導大師が取られた表現が、我々の行が全うしえない理由は、我々の能力や環境の問題ではなく、理由は如来が真実であるからだと。そして如来が真実であるということは、三界の中にありながら、三界を超えようとする我々は虚偽であるということだと。

けれども法然の勧めた「ただ念仏」が、そういう自身を深く信ずる、知ることだということが受け取りがたいためにいろいろな異議が生じます。

今日でも、信心を抜きにして念仏が受け止められている部分がとても強い。呪文や道具のように受け取られて、信心という、念仏している自分が問題になるということはない。

自分を固めたり、大きく見せたりして自分を安心できるものとして仕立てあげようとすることはあっても、そういう自分が明らかになるということはありません。

けれども念仏には信心ということがある。念仏とは自覚の法、目覚める道である。法然上人が「ただ念仏」と勧められたのは、気づくことのなかった自分自身に目が覚めるということが念仏にはあるのだと。親鸞が『教行信証』に「信巻」を開いた理由もここにあるわけです。

自分自身に目覚めると申しましたが、三界を超えた世界によって目覚めた自身には、共通した人間理解が成立します。

法然や親鸞には、「愚痴の法然房」とか「愚禿親鸞」という名のりがありますが、三界を超えた世界を知るということは、自分で自分を持ち上げようとするような愚かしいことを繰り返しているのが我々の世界であるという、そういう「愚か」ということで共通なるものを見出した。

そしてそれは人間世界に現れる共通認識であるけれども、同時にその三界を超えた世界が共通の場となります。三界には共通の場がないのです。

我々の世界は、制度によって共通であろうとしながら、その制度によって引き裂かれ、人間に上下優劣を作り出している。制度というものの持っている怖さです。

本来人間には上下がないのに、制度が人間を変えていく。我々の住んでいる世界には、共通という認識も場所もない。通じ合えないのです。

その点で、この三界を超えた世界は共通の場という意味を持ちます。人間に共通という認識をもたらす。

そしてその共通の認識によってこの世界を生きることができる。それが正定聚不退ということでも表されていることかと思うのですが、次回に触れてみたいと思います。

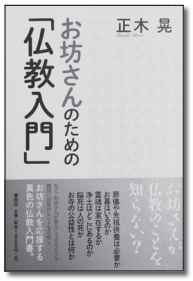
（平成三年度　第四回講義　平成三年十月十四日）

本の紹介

●お坊さんのための「仏教入門」

第1章　葬儀　仏教は葬儀から始まった
第2章　女性と仏教をめぐる課題
第3章　大乗仏教の立ち位置
第4章　東日本大震災から見えてきた仏教のありかた
第5章　僧侶の品格
第6章　現代仏教の重要課題
公益法人・脳死・子育て

正木　晃著（春秋社）
定価（本体一八〇〇円＋税）



本書は、筆者の宗教学という立場から、現代の仏教界の課題について語ったものである。第4章において、筆者は浄土真宗の説教の力について言及している。鎮魂や供養といった内容とは異なり、被災者と同じ目線に立って共に救われる真宗の教えが注目された事実を指摘している。

●念仏の音が聞こえるとき
―『正信偈』『歎異抄』との対話―

第1部　ひとこと法話50
―日常の人・自然との対話―
第2部　『正信偈』のことばと対話
第3部　対話のなかの『歎異抄』のことば

大窪　康充著（法蔵館）
定価（本体一〇〇〇円＋税）

本書は、真宗大谷派浄土寺（白山市）発行の機関紙「浄土寺だより」第1～50号より、「巻頭法話」「『正信偈』を読む」「『歎異抄』を読む」の再録にあたり、適宜書き改めたものである。全体的な内容は、日常生活の対話にこそ生きた仏教があるという視点にたって、親鸞の教えの一端に触れるものである。

●浄土を生きる足音
―真宗門徒のことば―

第1部　恵みの大地に生きて
―白山市浄土寺門徒文集―
第2部　真宗の儀式と仏事
第3部　浄土寺の由来

（松任郷土研究会　上出　輝著）
大窪　康充編著（北國新聞社）
定価（本体一〇〇〇円＋税）

本書の中心は、右記と同様の浄土寺発行の機関紙において、門徒の皆さんに執筆していただいた原稿をまとめたものである。複雑な胸中から絞り出す門徒さんの言葉から、厳しい時代と社会を生き抜いた確かな足音が、念仏の響きとなって私たちに届いてくるものである。

編集後記

『震動』第二十二号をお届けします。先ずは原稿を寄せていただいた方々に御礼申し上げます。巻頭言は高岡英丞指導が担当しました。昨年度の特別講義からは、木越祐馨先生の「本願寺留守職について」を掲載します。覚信尼の人柄や苦労、そして留守職の「るす」という言葉の意味合いや、時代の流れの中で京都と関東との関係がどのように変化してゆくのかが、わかり易く述べられています。また本願寺初期の歴代が聖教を製作する能力に長けていて、そのことが本願寺の大きな力となってゆく様子などを興味深く聞くことができます。

今年五月、新潟県立歴史博物館にて「親鸞となむの大地」というテーマの展覧会があり、出展される恵信尼消息の実物をこの目で見たくて行ってきました。実物を見るまでは、いにしえの女性のお手紙だから、きっと繊細な筆遣いに違いないと思っていましたが、意に反し実物は、かなり厚そうで大き目な紙に、これまた繊細とは程遠い仮名文字が書きなぐられているような印象でした。これが大変な時代を宗祖と共に生きた女性の文字なんだなと、変なところで感心しました。覚信尼の寄進状や譲り状の実物は見たことはありませんが、やはりよく似た文字なのでしょうか。

平野先生の『教行信証』入門は、平成三年度の特別講義、第四回目の講義録です。先生が平成七年九月に亡くなられて早や二十年近くを経て、現学院生の皆さんには残念ながら、先生の声やお顔を知っている方は少ないだろうと思います。先生は当たり前のことですが、どのように話せば相手に心が伝わるのか、ということをとても大切にされていました。中学生相手には中学生に伝わるように、高校生相手には高校生に伝わるように、釈尊や宗祖の心を噛み砕き、言葉や比喩を駆使して伝えようとしてくださいました。私自身、先生とはじめてお会いしたのは、高校生の集いで、難しい顔をしながらも易しい言葉で話してくださったように記憶しています。

（松扉　等）